

# 令和元年度スポーツ科学シンポジウム What Do We Learn From Rugby And Its History?

レジナルド・クラーク  
Reginald Clark

日本大学スポーツ科学部 客員教授  
College of Sports Sciences, Nihon University

2019年10月31日(木)

司会(益子) きょうのテーマは「What Do We Learn From Rugby And Its History?」です。講師は、日本大学客員教授のレジナルド・クラーク先生です。簡単にクラーク先生の略歴をご紹介します。

出身はイギリス、ドーラム地方。そこからオックスフォード、クライスト・チャーチ・カレッジへ。クライスト・チャーチ・カレッジは、オックスフォードの中では一番大きい、お金持ちの大学です。またハリー・ポッターのロケを行ったカレッジでもあります。

オックスフォードを出て神戸製鋼の海外営業部に勤務をされ、ラグビー部ではスタンドオフとして活躍されました。一緒にプレーされたのは、1987年第1回ワールドカップ日本代表のキャプテン林敏之さんです。そのあとスイス銀行、山一証券、神戸製鋼の欧州財務部長などを歴任され、現在はイギリスのラグビー用品メーカーの「ライノ・ラグビー」のCEOとして活躍されています。

ラグビーは、オックスフォードブルーでプレーされましたが、ケンブリッジブルーとオックスフォードブルーは非常に高い称号です。その後ラグビーで国際的にも活躍して、2016年には日英友好事業で日本の外務大臣表彰もされています。今年は日本でワールドカップが開催され、イングランドが決勝にまで勝ち上がり、クラーク先生も非常に盛り上がっておられます。土曜日のイングランドと南アフリカの試合では、ゼ

ヒともイングランドを応援していただけだと思います。

昨年、クラーク先生から、こちらのキャンパスに非常に貴重なものを寄贈いただきました。イングランドのジャージにイングランド代表選手のサイン、エディー・ジョーンズさんのサインもありますので、ぜひご覧になってください。

きょうは1時間ほどご講演をいただきますが、通訳はロンドン在住のジャーナリストの竹島智さんです。雑誌『ラグビーマガジン』にクラーク先生が毎月連載しているものを、日本語に訳している方です。彼も現在、ロンドンジャパニーズのプレーヤーとして活躍しています。それではクラーク先生、お願いします。

レジナルド 本日はこのような機会をいただき、非常に感謝いたします。特に大塚学長、小山学部長と益子先生には、感謝申し上げたいと思います。それからスペシャルゲストの林敏之氏とデビット・カーク夫妻。デビット・カーク氏は、1987年の第1回ワールドカップでニュージーランド、オールブラックスが優勝したときのキャプテンです。ほかにもお越しいただいた方々に感謝申し上げます。

私はオックスフォード大学で、スポーツの歴史を専攻しました。現在は、毎月『ラグビーマガジン』に、「ラグビー精神でいこう」というコラムを書いています。1980～1983年は日本の神戸製鋼のクラブでプレーしていて、その間『ラ

『ラグビーマガジン』で「知られざるラグビーのルーツ」という、ラグビーの歴史に関するコラムを書いていました。日本の皆さんにラグビーの歴史があまり知られていなかったので、お伝えしたいと思ったからです。

日本に滞在中の1981年2月、一度故郷のイギリスに戻ることにになりました。出身地の近くにあるセジフィールドでは、中世時代から行われている原始的なフットボールゲームがあります。毎年2月のある火曜日に行われる試合ですが、いまだに行われています。それを見て、最初の記事を『ラグビーマガジン』に書かせていただきました。一つ目は、日本のラグビーの歴史は何を物語っているのか、日本の歴史そのものはどういう意味を持つのか。二つ目は、ラグビーの歴史が何を語ってくれるのか。特にウェブ・エリスの伝説、何が事実なのかについてお話ししたいと思います。

この絵は1867年日本で初めて行われたラグビーの試合、YCACという横浜のラグビーのクラブを描いたもので、イギリスの雑誌『グラフィック』にもこの絵が載っています。マイク・カルブレイスさんは、YCACで行われたものが日本で最初のラグビーの試合だと長いこと主張されていました。それはなかなか認められなかったのですが、最近認められてBBCに載りました。1866年にYCACでプレーされたラグビーのゲームが、現存する最古のアジアのクラブでプレーされたものと証明されたのです。

なぜこの歴史に対して異論があったかという点、1887年に慶應大学でプレーされたラグビーの試合に日本人が入っていたことによります。日本のラグビー関係者の大半は、日本人が入っているということで、これが日本で最初のラグビーの試合だと考えたからです。そのため、なかなかマイク・カルブレイスさんの説が認められなかったのです。1887年の写真から、ラグビーは日本である程度の層の支持者を得ているスポーツだと考えています。

ラグビーというスポーツは、ルールではなくその価値観によって定義されているスポーツだ

というのが私の考えです。そこで定義されている価値観は、日本の社会的価値観と非常にオーバーラップする部分も多く、そういった理由から日本で非常に人気のあるスポーツなのではないかと考えています。イングランドのプレミアリーグの試合で、選手が偽の出血の負傷をして利益を得る、要するにだますようなプレーをしたチームがありました。そういったスキャンダルを経て、ラグビーユニオンは「ラグビーとはこういった価値観に基づいてプレーするスポーツだ」として、のちほど触れる五つの価値観を定義しました。

ちなみに、新渡戸稲造さんが書いた『武士道』は、西洋人に日本の武士道精神を説明する上で非常に有益な本だと考えています。ここで書かれている武士道という精神的な価値観が、イギリスのパブリックスクール、学校で教えられているラグビーの価値観と非常に共通点があります。このことは、日本でラグビーの人気がある理由の一つではないかと考えています。

オリンピックで有名なクーベルタン男爵が言った、*Noblesse oblige* (ノブレス・オブリージュ)、「高貴な者の義務」という言葉があります。こういった価値観はラグビーに非常に似ています。クーベルタン男爵は、ラグビー校というラグビー発祥の地であるとされる学校をよく訪れていたそうです。ノブレス・オブリージュは、日本のラグビー関係者の間でいわれているノーサイド精神とよく似ています。

柔道が1964年の東京オリンピックから、正式な種目として加わりました。それまで古い考え方をしていた柔道関係者は、柔道は勝ち負けだけに左右されるオリンピック競技には合わないと反対していました。最終的にオリンピック種目として採用されましたが、いまでも柔道の元となるコンセプト、つまり勝ち負けだけではなく、価値観に沿ったプレーをしなければならないというところでは、ラグビーと共通点があると考えています。

香山蕃(かやましげる)さんは、日本のラグビーの創設に非常に重要な役割を果たした人物です。

香山氏と秩父宮さまはイギリスで交流のあった友人同士であり、2人ともラグビーというスポーツの価値観に共感を覚えたといわれています。香山さんは『ラグビー・フットボール』という本を書いたことでも知られていますが、その中にはラグビーのルールではなく、ラグビーの精神的な側面について書かれていました。

ちなみに、日本代表が初めて結成されたときのジャージの桜は、三つの花のうちの二つしか咲いていませんでした。三つ目はイングランドとの対戦が実現したとき、つまり一人前のラグビーだと認められたときに咲かせよう。そういう意図がありました。日本代表の現在のジャージの桜、エンブレムには三つの花が咲いています。花が咲いたのは、1952年のオックスフォード大学の日本遠征のときでした。オックスフォード大学と試合をしたのだから、イングランドと同じでいいだろうということで三つの花を咲かせることにしました。

香山さんと東京大学で一緒に勉強したというエドモンド・ブルンデンさんは、第一次世界大戦に参加されています。そのときのつらい思いは、ラグビーをプレーすることによって解消され、世界をまた蘇らせてくれる。そういう詩に乗せて書かれた歌です。

#### (歌)

1930年代には、外国の名前をスポーツに使うことは嫌だということで、ラグビーは「闘球」と表現されていました。しかしながら、そんなときでも東京大学ラグビー部は英語の歌を歌っていたことにはいたく感心します。

それでは、ラグビーの歴史は何を語っているか。当時のイギリスのパブリックスクール、要するに上流階級の人たちの行く学校では、とにかくスポーツに自分たちの学校の名前を付けたがる傾向がありました。例えばファイブスというスポーツに自分の学校の名前を付けて、学校の名前を世の中に広めようとしていました。イギリスのヴィクトリア時代は、何でも「自分たちが発明した」と言いたがる時代でした。バドミントンは、当時公爵だったバドミントン家の

名前だということです。

#### (動画上映)

動画はイギリス首相のボリス・ジョンソンでしたが、ご存じのようにブレグジット法が非常に難航していますね。セジフィールドから古代のサッカー、フットボールが発生したと言われており、ラグビーもここから発生したということです。ちなみにここは私の出身地ですが、ラグビーもフットボールもここから発明されたものだと思いますよ。でもボールを蹴るという原始的な誰にでもできるようなスポーツなので、ある国の誰かがフットボールを発明したというのは、非常にナンセンスなことだと思います。またウェブ・エリスの伝説、神話、サッカーの起源は？など、いろいろな話があります。ヴィクトリア時代に出版された有名な本には、ウェブ・エリスの伝説をにおおすような、ラグビー校の宣伝のような要素が含まれています。

1851年、ワーキングクラスの人たちに、土曜日の午後に半休を与えることを強制する法律ができました。それまで日曜日は休みでしたが、キリスト教のルールで教会に行かなければならないので、サッカーをする時間はありませんでした。この法律のおかげで、土曜日の午後が暇になったワーキングクラスの人たちは、毎週サッカーをする時間ができたのです。

表は、1882年までのサッカーの国内大会の優勝チームと準優勝チームです。ほとんどのチームは、上流階級の人たちだけが行くパブリックスクールか、上流階級の人たちが集まっているクラブでした。けれども1883年以降はワーキングクラスの人たち、つまり工場や炭鉱の労働者たちで結成されたチームが優勝するようになりました。これはイギリスのサッカー界に大きな影響を与え始めます。

ラグビー界でも同じようなことが起こります。時代は少しあとですが、1896年以降に優勝したヨークシャーやランカシャーは、北イングランドのワーキングクラスの人が非常に多い地域です。南のケントには、それなりの階級の人たちが多く住んでいます。サッカーで起こったのと

同じような状況で、ワーキングクラスの人たちがスポーツの大会で勝ち始めました。

1871年、初めてイングランド対スコットランドのラグビーの国際試合が始まりました。スコットランド人は、ラグビーがイングランド人によって定義されることが非常に嫌で、違う名前の「ザ・グレート・ペアレント・コード」と呼びました。誰がこのゲームをつくったのかについては、活発な議論がされていました。

ウィリアム・ウェブ・エリスは、ラグビー校の神話の中に出てくる、突然ボールを持って走り出していた人です。実際にこの人が、生前から非常に有名であり、神話の中心になるような人だったかという、そんなことはありませんでした。ラグビー校の人たちが、ウィリアム・ウェブ・エリスを使って、自分たちの学校がこのスポーツの発祥だということを主張するために「神話化」したのです。

要するに、このウェブ・エリス伝説はまったくの作り話で、1971年にラグビーフットボールユニオンも「これは実話ではない」と表明しています。アップークラスの学校が、自分の学校の名前をラグビーのルーツだと主張することに、ワーキングクラスの私としては少し腹が立ちますね。なぜワールドカップの優勝トロフィーを「ウェブ・エリス・カップ」と呼んでいるのか。フットボールのルーツは、私の出身地であるセジフィールドなので、これからは「ザ・セジフィールド・トロフィー」と呼ぶキャンペーンを始めたいと思います。(拍手)

司会 ありがとうございます。クラーク先生とは20年来のお付き合いですが、ことラグビーに関しては一晩中話をしても尽きないという方です。ラグビーのワールドカップの決勝は11月2日で終わりますが、にわかラグビーファンも増えて、テレビでも非常に高い視聴率を記録しています。

ラグビーをちょっと見ると、サッカーや野球とは違う雰囲気があることをお分かりでしょうか。試合が終わるとノーサイドということで、

選手がしっかり握手をし、互いの健闘をたたえる。ワールドカップが始まる前は、世界中が日本での開催は成功するのかと疑問符がついていました。しかし、日本のおもてなし文化がラグビーにも浸透したのか、各国のプレーヤーが試合が終わって観客にお辞儀をすることが世界中に広まりました。

これはクラーク先生がお話ししていた、ラグビーというスポーツが単なる勝ち負けではないと…きょうは女子柔道部の学生もきていますけれども、柔道も勝ち負けが全てではない。お互いのジェントルマンシップを認め合うことが大事であり、それがラグビー精神の根本にあるということです。ワールドカップの開催により、今後日本にもっとラグビーが定着すればいいなと思っています。

ワールドラグビーが提唱しているラグビー憲章では、品位 (INTEGRITY)、結束 (SOLIDARITY)、情熱 (PASSION)、規律 (DISCIPLINE)、そして尊重 (RESPECT) の五つが提唱されています。これはラグビーに限らず、いろいろなスポーツにも言えるので、学生にはそれらを頭の中に置いて、勉強にスポーツに励んでもらいたいと思います。

以上で講義は終わりますが、質問のある方はお願いします。

質問者 A (英語: 英文の稿を参照)

竹島 (通訳) いまのご質問ですが、イングランド代表のキャプテンは、オーウェン・ファレルという北部出身の選手です。クラーク先生も北部出身ですが、北部の人たちはワーキングクラスが多く、イングランド代表のキャプテンは北部の人たちでやるべきかという質問に対してクラーク先生はその通りだと述べました。クラーク先生は、ラグビーの歴史を語ると同時に、ワーキングクラスとしてのアイデンティティを忘れずに、ワーキングクラスを支持するという発言をいろいろなところでしているの、サポートしてあげてください。

イートン高校はボリス・ジョンソンの出身校

でもありますが、イギリスで最も学費が高いパブリックスクールで、貴族階級の人たちが行くような学校です。サッカーが実際に「イートンフットボール」と言われていたとしたら、このスポーツはどれだけの人気を得ることができたでしょうか。みんな、生まれながらにリッチな貴族階級の人たちはあまり好きではないでしょう。

クラーク先生は、ライノ・ラグビーというラグビーメーカーの会長です。日本に来る際にラグビーワールドカップということで、漢字で「犀」を書いてみようとしてプリントアウトしたところ、日本人は誰も読めないことに気が付いたそうです。皆さん、これを機会に漢字で「犀」と書くと、こういう字だということを知っていただければと思います。よろしくお願ひします。ちょっと大きいサイズですが、ご自由にお持ち帰りください。

質問者 B 貴重なお話をありがとうございました。私は読売テレビの『ウェークアップ!ぷらす』という報道番組でアシスタントディレクターをしている者です。

この間の『ウェークアップ!ぷらす』で奥克彦さんに関する20分ぐらいの長い特集をしました。オックスフォードでも、クラーク先生に取材をさせていただきました。本当にこんなにすごい人がいたのだと、もちろん奥さんだけではなく、いろいろな方がいたということだと思います。今回ラグビーの日本代表のベスト8を含めて、天国にいるいろいろな方々の思いが背中を押していたのかなと、一取材者として思っています。このワールドカップの成功を、いま天国の奥さんがどのように見ていらっしゃるか、また奥さんにどのような言葉をかけたいかを聞かせていただきたいと思います。

司会 ありがとうございます。奥克彦さんは僕の大学のラグビー部の二つ先輩です。僕は20年前に海外に短期留学しようと思い、オーストラリアがいいなと思っていたところ、奥先輩に呼び出されて「ラグビーを勉強するならオック

スフォードに行け」と言われました。そこでレジさんを紹介されて、それからの付き合いになります。「ラグビーワールドカップを招致しよう」と最初に言ったのは奥さんです。あの人が外務省にいるときにイギリスと日本を駆け回って、その当時の森元首相に「ワールドカップを呼びましょう」と熱く語っていまに至ります。

竹島（通訳） 背景を説明します。先ほど言っていた「奥さん」は、奥克彦さんという外務省に勤務されていた方です。ロンドンに派遣され、ロンドンからイラクへ平和支援のために送られました。しかしそこで凶弾に倒れ、命を落とす運命をたどられた方です。彼はロンドンではロンドンジャパニーズでプレーしており、かつてオックスフォード大学にも留学されてレジナルドさんと交流を深めたということです。

奥さんが、日本でのワールドカップ開催に果たしてくれた貢献は非常に大きなものがあります。奥さんだけではなく、非常に多くの方の力によって実現した日本のワールドカップです。奥さんとは非常に近い友人でしたが、もうこの世にいないので、彼が今回のワールドカップのためにどれだけ貢献したかを知ってもらいたいと思い、いろいろなところで話をしたいと考えています。

司会 ありがとうございます。それでは、これで令和元年度スポーツ科学シンポジウムを終了します。ありがとうございました（拍手）。